

株式会社 今井産業

e・Wood+

青森県の広葉樹をもっと地元で活用しよう——をテーマに、(株)今井産業の今井公文会長と、(株)ランバーテック工業の奥山悟社長による「県産材談義」が行われた。冒頭、木製ダンボール『e・wood+』で製作した椅子が平川市ふるさとセンターに設置されたという朗報が今井会長からもたらされた。『e・wood+』の生みの親が今井会長だ。「その椅子に『県産材』のシールを貼りましょう」と奥山社長。県産の木で製作したことをアピールしようという提案である。談義では、県内の公共施設や学校に地元の広葉樹で作った製品の普及を願う意見が交わされた。

地元の広葉樹で作った机や椅子を学校に 身近に触れてこそ県産材への関心が育つ

丸太が山積みされた広大な敷地は6800坪。東京ドームの約半分もある。弘前市清水森にある(株)ランバーテック工業の工場だ(株)今井産業(今井公人社長)のグループ企業)。丸太の皮を剥ぎ、ロータリーにかけてかつら剥きにし、単板を製造する。10年前に今井公文会長

(当時は社長)が新素材として開発した木製ダンボール『e・wood+』も、この工場の一角で製造されている。

ランバーテック工業の事務所の窓から、L字型に建つ製造工場と、敷地に積まれた丸太の山が見渡せる。ここに集められる丸太は、地元産のものばかりで



木製ダンボール『e・wood+』もここで製造されている(株)ランバーテック工業の工場



東京ドームの約半分もある工場の広大な敷地内には、丸太が山積みされている(左側がカバ、右側がナラ)

ない。他県からもこの木で椅子などを作ってほしい、と丸太が送られてくるのだそう。なぜか。かつら剥きできる製造工場が他県にないからである。今井会長が話す。

今井会長の話 日本に今、原木をかつら剥きにできる機械を持つ工場はほとんどありません。せいぜい10社くらい。本州ではランバーテック1社だけです。あとはみんな中国へ移ってしまつた。理由は言うまでもありません。人件費が安かつたからです。他県から、木が送られてくるのは、その県に単板にする工場がないからです。あちこち調べて、青森にあるランバーテックにたどり着くわけです。

奥山社長の話 黒石にある県森連津軽木材流通センターで毎月、木材のセリが行われます。そこで入札してブナやナラや、カバ、ヤマザクラといった広葉樹を仕入れます。それを単板にするところまでが当社の仕事です。単板は県外の家具メーカーに買われていきます。そこで貼り合わせて机や椅子に仕上げられるわけですね。その机や椅子は、青森県内の学校では使われていません。県産材が原料なのに、消費される先は他県なのです。地元に戻元されなければ、お金は落ちないし、山から広葉樹を伐り出す経費も出ないし、林業は廃れる一方だし、机や椅子を作る家具職人もいなくなるし、良いことはありません。これから将来がある若い人たちが働く職場が増えないことには地域に活気は出ませんよ。

今井会長の話 学校の備品の仕入れは、入札になります。国産の物でなければならぬとい



丸太の皮を剥ぎ、ロータリーでかつら剥きにして製造された単板は、
県外の家具メーカーに買われていく

う制限はないから、材料にしても製品にしても海外のどこの国から入ってきた物でも安ければ落札するわけです。一番安いものに決まる。国産材で製作するより半値くらいで入ってくるのだから勝てるわけがない。国産材の使用率が低下したのはそういうことも大きく影響しているはずですよ。

産地問わず安価が落札 県産材を設計織込みに

奥山社長の話 価格競争では太刀打ちできないのだから、県産材を普及させようというのなら、設計の段階で県産材使用を織り込むことが一番だと思います。設計織り込みですね。県産材を使うことを条件とするわけです。学校を新しく建てる場合でも体育館の床や壁や天井には県産材を使うとかね。初めから使用することを条件にするのです。県産材を優先する「姿勢」ですよ。それをもっと強く打ち出してほしいもので

す。

今井会長の話 全部の小・中

学校となると今までの流れもあつて難しいから、椅子ならとりあえず何十脚とかね。あるいは1クラスだけとか。そういう小規模からまずスタートして徐々に増やしていくとか。議会の承認とかもあるから一気には進まないでしょうけど、まず取っ掛かりがほしいですよ。やろう、と動き出して、実績を積み重ねていく。時間をかけて育てる。ものづくりと一緒にですね。

奥山社長の話 弘前にも

腕のいい家具屋があるんですよ。店は小規模ですけどね、机でも椅子でも良い物を作るんです。そういうところとタイアップしてやっつけていけば、力がついていくんですよ。職人も育つし、雇用も生まれる。それが本来の“地産地消”の目的のはずなんです。



紅葉樹から製造される単板には1枚として同じ木目のものはない

ところが現状は、地元では単板だけを提供して、製品作りは県外で行われ、県外で消費されている。これではいつまでも地元が潤いません。県産材といつてもヒバやスギやアカマツといった建築用材ばかりに目が向けられて、広葉樹は“蚊帳の

外”のような扱いです。広葉樹だつて青森県には一杯あるんですよ。ブナ、ナラ、カバ、ヤマザクラ、オニグルミ、クリ、クルミ……。貴重な木材資源が豊富にあるんです。

今井会長の話 バイオマス発電の原料として伐られた木は、

燃やせば何もなくなります。それはそれで電気を生み出す原料としての価値はあるけど、一本の木というものを、長い時間かかつて育った生き物として扱うのが大切だと思っんです。捨てることなく最後まで使い切ろう、という思い。木製ダン

ボールの『e・wood+』を開発したのもそうなんです。原料は、単板の製造過程で排出される廃材です。ランバーテック工業では1日に8トンも出ます。捨てれば単なるゴミですが、それを原料とした0・5mmの薄板に、高さ6mmの波形を付けて誕生したのです。原料が木だから、水に強く、軽い。100%リサイクル可能な木製エコ素材。そこが『売り』です。

デビューさせる場合は、人の多いところでと考え、東京のビッグサイトにしました。『産業交流展2012』で、青森県生まれの新素材として初披露したのが8年前です。東京ではすでに『e・wood+』はビルの内装材などに設計段階で採用されるようになっていし、また大手ネット通販の「amazon」と提携し「組み立てキット製品」なども世界に向けて発信されています。それがウターンして、平川市ふるさとセンターに『e・wood+』製の椅子が



平川市ふるさとセンターに設置された『e・wood+』製の椅子

設置されたというわけですが。地元へ「還ってきた」のです。

奥山社長の話 愛知県では、小・中だけじゃなく、保育園・幼稚園まで地元材の机や椅子を使う事業を展開しています。もう7年も続いています。大手の自動車会社の援助があればこそ出来ることでしょうけど、「地元材の木を使おう」という熱意がまずあって、それを企業が援助したということですよ。でも、援助がなければいなり「取り組み方」の工夫があるはずだと思えます。予算がないから半値の安い物にする、ということじゃなしにね。それでは将来に繋がらないし、育つものがありません。

観光拠点に「椅子」設置 地元へ「還った」新素材

今井会長の話 「青森県産材の活用」を呼びかけても、子供たちが毎日学校で使っている机や椅子が県産材で作った物ではないという現実がある。その

ギャップを埋めていくことから始めなきゃ、と思うんです。

例えば教室の椅子の天板が地元のカバで製作したのなら、そのカバの木とはどういう木なのか。どんな姿で山に生えているのか。実際にそれを見に行く。伐られた丸太をかつら剥きにして薄い板にしている工場も見学してみる。カバの単板を加工して天板に仕上げる家具職人の仕事ぶりを見る。——そういう体験を通して得た知識が身に付くのだと思うんです。

輸入品の、名前も知らない木を使った椅子に座りながら「県産材」の話聞いても「身近じゃない。だから興味もわかない。「県産材」に意識を向けるのじゃなく、「県産材」を身近に置いて触れる環境をつくるのが先ですよ。

*

取材後、平川市ふるさとセンターを訪ねた。白い大きな猿賀神社の鳥居をくぐり、社務所の前から緩い坂道を下りていく

と、ホテルのような2階建ての新しい建物の前に出た。玄関の上部に「平川市観光協会」、その脇に「平川市ふるさとセンター」。観光を発信し、地域住民の憩いの場として整備された施設だ。

『e・wood+』で製作された目当ての椅子は、1階のロビーに置かれてあった。3人掛けの長椅子が5脚、2人掛けが1脚、1人掛けが2脚。脚部が『e・wood+』の波形の断面が見える。一見、紙のダンボールのようだが、触れば木と分かる。木は木でも、廃材を活用して地元で開発された新素材であることを発信するために『県産材』のシールを貼ろう」と奥山社長が提案したのだ。

ランバーテックの工場で、地元の広葉樹をかつら剥きにした単板が送られていく先は、他県だ。その流れを、地元へ還元できないものか。——今井会長と奥山社長は「県産材回帰」を願うのである。



自然のぬくもり暮らしの中に

株式会社 **今井産業**

本

社 ●平川市新館藤山16-1

TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568

<http://www.niijironomori.net>

弘前常設展示場 ●弘前市泉野3丁目16-4

TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441

E-mail: llp-genki@clear.ocn.ne.jp

青森常設展示場 ●青森市富田4丁目12-22

TEL.017-752-0981



薪ストーブ愛好会「くべる部」

〈事務局〉企業組合 県木住

仲間内では「会長」と呼ばれ、親しまれている佐々木奥男^{むらお}さん。薪ストーブ愛好会「くべる部」の会長だ。「くべる部」とは、企業組合県木住で薪ストーブのある家を建てたユーザーたちの集まり。14年前の2006年に、自宅を県木住で建てた佐々木さんは、山でスギの立木を施主自ら伐採する体験会に参加して、チェーンソーの魅力にはまった。昂じて、林業従事者の資格を取得。薪を調達するため青森空港のそばの山(愛称「くべ山」)まで買った。今度求めたのは、「隠れ家」。―隠れ家でBBQをやろう！― スーパーで肉を買い、陸奥湾沿いの国道280号を向かった。

県木住と出会って 人生が変わった

木まなな隠れ家暮らし 佐々木奥男^{むらお}さん

「隠れ家」―男心をくすぐる言葉だ。「男の隠れ家」。少年に返ってわくわくするような響きがある。隠れ家気分で屋根裏の天窓から星や月を眺めるのはいがい男性である。女性が心をときめかせる宝石と、男にとつての隠れ家とは対極にあつて輝くものなのかもしれない。

さて、佐々木さんの隠れ家だが、これは屋根裏でもロフトでもなく、れつきとした一戸建てだ。上磯地方の小橋にある木造2階建てで、延べ56坪。築48年で、継ぐ住まい手がいなくなつて売りに出たのを、佐々木さんがネットで見つけて取得(2019年1月)した。新青森駅に



チェーンソーの魅力にはまり、林業従事者の資格まで取得した佐々木会長。腕前は玄人はだし



3本の命綱で体を支え、チェンソーで枝を切ってはロープで吊り下ろす(下に2人待機)

近い石江に佐々木さんの自宅はあるが、今ではひと月の半分ほどは隠れ家で過ごしているそうだ。「青い森鉄道」を65歳で退職、これからの時間は全部自分のもの——。そんな佐々木さんの悠々自適の人生を謳歌する場が、隠れ家なのだ。

北上する国道280号の右手は海、左手には津軽線が並行している。隠れ家は、国道から左折し、津軽線の踏み切りの手前にあつた。イメージとは反対の大きく立派な家だ。敷地も広く、小屋まである。

玄関を開けて、声をかけた。「会長」

笑顔の佐々木さんが出迎えてくれた。案内されたのは奥座敷。天井が高く9尺(約2m70cm)はある。室内が明るく、出窓も二重サッシになっているのはリフォームしたのだろう。大きな木のテーブルの前に腰を下ろした。天板に触った感触で無垢材と分かる。

「スギですよ。ほら、大鰐の山林

で県木住のチェンソー体験会のときに伐り倒したスギでこれを作ってもらったんです」と佐々木さん。

思い出す——大鰐町の山林で開かれた県木住主催の『もくもくきるきるチェンソー体験会』。2006年5月だった。その年に県木住で自宅を建てることになっていた佐々木さんも参加したのだ。黙々と木を伐る枝を切る——略して『もくもくきるきる』。自宅の大黒柱や柱や床に使うスギの木を、自らチェンソーで伐り倒すことから始める。施主参加型家づくり体験会の記念すべき第1回目であつた。

佐々木さんはこのとき初めてチェンソーを手にしたという。スターターロープを引いてかかるエンジン音。バイクのような音が鳴り響く。猛烈に回転するチェンソーのバー(刃)が、幹に食い込む。噴き出るオガ屑。高さ30mの梢がわずかに傾き、クサビを打ち込むにつれて



県木住主催の『もくもくきるきるチェンソー体験会』(2006年)に参加し、黙々と木を切る佐々木さん

どんどん傾き、耐え切れずにどおーっと倒れ込んで、生き物みたいに跳ねる。佐々木さんは感動に打ち震えていた。チェンソーに「はまった」瞬間であった。

「隠れ家でB B Q」に参加したのは、佐々木さん合わせ3人。県木住の佐藤時彦代表と、「青

森県産材の家」のライターのM。県木住の新事務所が浪岡に完成したときにも3人はバーベキューを囲んだ。薪ストーブの前で飲み、語り、寝袋にくるまった。

自宅があるのになぜ佐々木さんが隠れ家を取得したのか――。そこが関心事だ。といつても、別に自宅から「逃げた」わけではなく、「隠遁^{いんどん}」するわけでもないことは承知の上だ。聞くほうは、隠れ家暮らしをエンジョイしている佐々木さんがうらやましいのだ。

「ネットで手頃な物件を見つけて買う、それが楽しいんです。別に財産として残すとか転売するとか、そんな気はありません。定年後の人生を勝手気ままに過ごす場所なんです」

佐々木さんは盛岡出身。1953年生まれで今年(2020年)67歳。高校を卒業して国鉄(現JR)に就職した。最初の赴任地が野辺地の保線区。野辺地のホームに降り立った

4月1日は大雪で、ピカピカの革靴が雪にズボツと埋もれたことを、今でもくつきり憶えているという。

60歳でJRを定年退職。再就職した青い森鉄道での5年間が第二の人生。それから自由気ままな生活を満喫する第三の人生で、そのステージが隠れ家というわけだ。

「県木住と出会って人生が変わった」――佐々木さんはそう話す。出会いは2006年、その頃青森市幸畑にあった県木住の住宅展示場を見学に行ったときだ。

「県木住よりも、まずは展示場の『木』と出会ったんですよ。玄関に入ったら、丸太が1本立っていたんです。玄関に入っているなり木が立っているなんていう造りは他社の住宅にはありませんでした。床がスギの板というのも珍しかったですね。しかも無垢材です。たいがい他社の家はピカピカの合板フロアでした。その違いは足触りで分か

りましたね。無垢のスギの柔らかくて温かな感触。心地良かったです。柱もスギで、居間の吹抜けの梁はアカマツ。いいなあ、つて眺めたものです。あのとき、「木にはまった」んですよ」

そこから『もくもくきるきる』のチェンソー体験会に繋がります。『伐木等の業務に係る特別教育(大径木)』を受けて林業従事者の資格を取り、薪の調達に山を求め、そこに廃材で小屋を建てる、といったワイルドな生き様に繋がっていくのだ。

「薪祭り」など『くべる部』のイベントの会場として『くべ山』を提供したり、浪岡での県木住新事務所披露のユーザー感謝祭ではスタッフの一人として手伝うなど佐々木会長は県木住に欠かせぬ存在となっている。

電話線に絡む庭木の枝 チェンソーで伐採協力

隠れ家では、近くの踏み切りの警報音が目覚まし代わりに



薪割りイベントで手本を示す。一番大事なことは斧を力任せに振り下ろしてケガをしないこと

いう。キーン、キーン、キーン……。津軽線の踏み切りだ。その朝も、その音で目覚め、散歩に出たら、「危なっかしい」光景に出くわしたのだそうだ。佐々木さんが話す。

「庭木が伸び放題になっていて、頭上の電話線に枝が絡まっていたんです。それを切ろうとしていたんですよ。国道端の家で、ご主人らしい年配の人が、脚立にのぼってね。しがみつくような姿といい、ハサミを持つ手つきといい、危なっかしくてね。見兼ねて、声をかけたんです、切

りましょうか、って」

高い木の枝をチェーンソーで切り落とす——。ロープを使った木登りのコーチもする佐々木さんの得意技だ。電話線に絡まった枝に難儀していた主人にすれば、佐々木さんは「救いの神」に見えたのではないか。

このイイ話は町内で広がった。耳にして、よし頼もう、と佐々木さんに白羽の矢を立てたのは、地区の墓地を管理する町内会の人だった。墓地は、佐々木さんの隠れ家の目の前にある。スギの枝が伸び放題な

のは、隠れ家の下見にきたときから佐々木さんの目には映っていた。

「ここらは過疎で高齢者が多いから、高い所での枝切りはとてできません。自分にできるお手伝いをすれば、相手は喜んでくれるし、自分もまた嬉しい。この地域に受け入れられたような気がしてね。近所の人や畑の作物を持ってきてくれたり、そんな朴訥さが温かくてね、「木」とそっくりですよ」

隠れ家でのB・B・Qの夜は、持参した布団袋は使わなかった。以前の住人の置き土産だという布団を佐々木さんが敷いておいてくれた。ふかふかだった。踏み切りの音で目が覚めた。キーン、キーン、キーン……。音が止むと、夜明けの静寂が広がった。波の音はしないかと耳を澄ませたが、海までは少し遠いようだった。

全部の時間が自分のもの——。

贅沢な朝であった。

薪ストーブ愛好会「くべる部」

〈事務局〉企業組合 県木住

青森市浪岡大字徳才子字福田60-2

TEL.00172-55-7793 FAX.0172-55-7559

<http://www.kenmokuju.com>

E-mail : info@kenmokuju.com

ブログ「くべる部」奮闘日記

<http://kuberube.jugem.jp/>

